2014年度学生研究発表大会総括

学生研究発表大会教員世話役
経済学部教授　望月和彦

2005年度から再開された学生研究発表大会は年々規模が大きくなり，昨年度から予選と本選の二段階審査方式をとるようになった。

今年度の学生研究発表大会予選への参加は経済学部，社会学部，経営学部の３学部の15のゼミから46の個人・グループとなり，前年度比で微減となった。年度ごとに参加ゼミの顔ぶれの変動はあるものの，毎年度若手教員を中心に新規に参加するゼミがあることは特筆すべきである。新規参入のゼミがあることによりこのイベント全体に活気が与えられている。

参加人数は209名となっており，昨年度の196名から増加している。参加人数だけを見れば学生懸賞論文よりも規模がはるかに大きくなっている。もちろんこれは学生研究発表大会が基本的にグループ参加となっているためであり，この両者を単純比較することはできない。しかし自主的な取り組みによる学内のイベントとしてはかなり大規模なものに成長したと言える。

予選は12月10日（水）午後１時から３時過ぎまでの間でヨハネ館の４つの会場に分かれて行われ，審査の結果，各会場から２つずつ計８つの報告が本選に進み，その他に準佳作として各会場で３つずつ計12の報告が選ばれた。本選に進んだ報告の内訳は，経済学部から４報告，社会学部から３報告，経営学部から１報告である。

予選では，経済学部，社会学部，経営学部，国際教養学部の教員計22名がコメンテーター・審査員・会場責任者としてご協力を頂いた。このイベントは若手教員の協力によって成り立っている。若手教員の学生に対する指導力は非常に高く，それが学生研究発表大会にも現れている。

本選は2015年１月７日（水）午後１時から午後３時40分までハイビジョンシアターで行われ，開会に先立ち木下副学長の挨拶を頂いた。

本選では予選で選抜された８つの個人・チームが報告を行い，それぞれの報告に対して専任教員のコメンテーターから熱のこもったコメントを頂いた。また学生論集刊行委員会から２人の先生が審査員として参加して頂いた。

本選の見学者だけでも100近く，それに報告者を合わせると100名をはるかに超えたと思われる。形の上では十分に外部に見せても恥ずかしくないような状況になってきたと言えよう。

審査の結果，最優秀賞１組，優秀賞３組，佳作４組が選ばれた。このような審査結果になったのは，報告の水準が全体的に上がり，差があまりなくなったためである。これもまた指導教員の努力のたまものといえる。

また予選・本選ともほぼ予定通りに進行が行われ，時間管理もきちんとできていたと思われる。むしろ本選では15分の報告時間が余り気味であった。これまで予選10分，本選15分と報告時間に差を与えているが，もしかするとそのような差は必要ないのかも知れない。

学生研究発表大会を二段階選抜としたのは，会場間に発生する評価の不整合をできるだけ排除し，より公正な評価をするとともに，研究発表内容の質の向上を図り，このイベントが外部に対して開かれても恥ずかしくないようなレベルにするためであった。

第一の目的に関しては，会場間のレベルの違いは本質的に解消することは困難であり，公正な評価という問題は常に残るということが分かってきた。今回は金融財政分野，地域経済分野，経営戦略分野，社会現象分野という４つの分野に分けて予選を行ったが，やはり分野間での違いがあり，同じ尺度では計るのは難しいことを痛感した。

同時に審査の方法についても，レベルが接近すれば，審査のやり方もそれなりに厳密にしなければ公正さを保つことはできない。現在は参加ゼミの担当教員を中心に審査をお願いしているが，このようなやり方を続けることができるか，それにより公正さを保つことができるかというと疑問なしとしない。この点については大いに改善の余地があると思われる。しかしそのためには更に多くの教員の協力が必要であるという問題も残る。

第二の目的に関しては，二段階選抜の２年目ということでまだ確定的なことは言えないかも知れないが，プレゼンテーションのレベルは上がっている

と思われる。昨年度に比べても報告自体が面白くなっており，外部の人間，例えば高校教員や企業の人事担当者に来てもらっても十分に面白さは分かって頂けるのではないか。

本選の報告レベルになると方法論もしっかりしており，本学の教育レベルの高さを十分にアピールできるものとなっている。また学生研究発表大会がゼミ活動の一つの目標となり，ゼミ活動の活性化に貢献していると考えて良いと思われる。

従来からも度々ご指摘を受けているとおり，折角このようなイベントをしているのだから，これを大学広報に利用すればどうかという意見は根強くあり，当方としてもこのイベントを外部に公開できるように改善を積み重ねてきたところである。

来年度はさらに外部公開に向けて，本選の開催日を変更し，土曜日にできるかどうかを検討したいと考えている。これは土曜日にすることで高校や企業の方が来られやすいようにするためである。これはとくに教員にとって負担が大きくなることを意味するが，皆さんのご意見を伺いながら検討を進めていきたい。

本学が文科省の進めるアクティブラーニングを実践しており，大きな成果を挙げていることを高校や企業に広報することは，本学に対するイメージを変化させ，本学の社会的評価を高めることにつながるであろう。これはまさにコンテンツのある広報であり，広報効果は高いと思われる。

すでに述べたように学生研究発表大会の内容をレベルアップするためにも，また審査をより公正にするためにもより多くの教員の協力が必要となる。すると現在のように教授会のある水曜日に開催することはできなくなる。これまでは完全なボランティアベースで学生研究発表大会を開催してきたが，段々とその限界が見えつつある。

学長を初めとする大学当局に対しては，これから学生研究発表大会に大学全体として取り組んでいくよう切にお願い申し上げる。

最後にこの学生研究発表大会にご協力頂いたすべての学生・教職員のみなさまに御礼申し上げる。

以上